

The University of Texas MD Anderson Cancer Center “Making Cancer History”



こちらヒューストン

齋藤 紀彦

東邦大学医学部脳神経外科学講座 (大橋)

はじめに、東邦大学医学部 (大橋) 脳神経外科学講座岩淵教授ならびに医局の皆様のご指導、ご理解、ご支援を頂き、こうして留学させて頂いていることを感謝申し上げます。

私は2011年6月より、米国テキサス州ヒューストンにあるMD Anderson Cancer Centerに留学する機会を頂いている。ヒューストンはテキサス州第1、全米でもニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴに次ぐ第4位の都市で、米国のほぼ南端に位置し、気候は亜熱帯気候、高温多湿である。1年の3分の2近くが夏で、とにかく暑い。真夏はあまりの暑さのため、外を歩いている人はほとんど見かけない一方、建物はどこも寒いくらい冷房がきいている。「地球上で最もエアコンを効かせている場所」と評されたこともあるぐらいである。

私の留学先であるMD Anderson Cancer Centerは75年の歴史をもち、年間延べ外来患者数120万人、現在進行中の臨床試験1100件、総研究費6億5千万USドルにものほり、標準治療の3分の1はMD Andersonで生みだされたと言われている世界有数のがんセンターである。そして、がん医療における臨床・研究・疫学調査・予防医学・社会啓蒙活動など、すべての面で世界をリードする存在であり続ける決意を“Making Cancer History®”という言葉で表現し、誇りと自信そして責任感をもって遂行している。

その中で私はDepartment of Neuro-OncologyのChairmanであるDr Yungの研究室に所属している。私の研究室では、glioma stem cellのゲノム異常の包括的解析を行い、遺伝子発現プロファイルに基づいたクラス分類を行っている。そのデータに基づき各クラスで特異的に活性化しているシグナル伝達経路のglioma stem cellにおける機能解析とそれに対する分子標的治療の研究が私に与えられた研究テーマである。



MD Anderson Cancer Center, 病院正面から。これでも巨大な施設の一部に過ぎない。



Dr WK Alfred Yung (左). 普段はとても優しいが仕事面では容赦なく厳しい。

留学は、世界の最先端の知識や技術に触れながら研究に没頭できるとも充実した時間であるが、一方で留学特有の苦勞も多く、悩み苦しむ時間も少なくない（もっともそのほとんどが私の英語力不足が原因であるが…）。その中で私が最も苦勞しているのがラボミーティングでの発表である。順番こそ1カ月半ごとにしか回ってこないが、その分1回の発表時間が1時間半もあるのである。2週間前から準備を開始するも、発表前日には準備作業が徹夜に近くなることもある。しかも本番ではこちらの進行などまるで関係なく自由に質問が飛んでくる。さすが“自由の国アメリカ”である。当初は読み原稿を作成し暗記していたが、予定通り進むことはまずないので、最近ではむしろ開き直って必要最低限のセリフだけ決めて挑んでいる。無事(?)発表が終わった直後でさえ、次の発表のことを考え心が休まることはない……本当は、もっと smart な留學生活を想像して

いたが、実際は“アメリカ研究社会”の最底辺に位置するポスドクの泥臭い研究生生活が待っていたのである。怪しげな英語を話し、コミュニケーション能力の乏しい日本人を優しく支えてくれるボスやラボの仲間には本当に感謝している。この年齢になってこのような経験を再びするとは思っていなかったが、これも留學でしか得られない貴重な経験であるし、これだけでも十分な成果だと思う（ようにしている）。

高く力強いアメリカの空を見上げながら、宇宙にも到達することができる人類でさえ、いまだ克服できない脳腫瘍とは一体何なのか? 今後も人類は敗北し続けるであろうか? ふと考えるときがある。それでも先人がそうしてきたように、自分の研究が将来もたらずかもしれない患者さんの笑顔のために、また今後続く後輩達にとっての礎になれるよう、もう少し頑張っていきたいと思う。